



鮫島、三人の  
元カノに  
会いに行く

たなかひまわり

人生の幕を降ろそうとしている俺。  
悔いはない。  
たぶん、ない。  
おそらく、ない。  
ホントにないか？  
彼女達はどうしているだろう。  
高校時代、とんがっていた俺を支えてくれた彼女達。  
年を重ねた今の俺なら幸せにしてやれたのに……。

\*\*\*

俺は病院のベッドの上に横たわっていた。  
数か月間見続けた、代わり映えのしない天井を見つめる。  
真綿で首を絞められたように息が苦しい。

意識が朦朧とし、時折、気を失う。  
あちらの世界に半分、足を踏み入れているのか。  
早いところ安住の地で落ち着きたいものだ。

再び気を失いかける。  
その時、ベッドサイドに霞にも似た淡い光が現れた。  
目で見るというより、感覚で捉えている。

神経を研ぎ澄ませる。  
銀に近い白の着物をまとった老人がいる。  
老人は俺の脳に何かを問い掛けてきた。

しかし、何を言っているのかがわからない。  
受け止めなければならないメッセージのような気がする。  
俺は必死にその言葉の意味を追った。

『三日間、過去のおまえと中身を入れ替えてやる。いつに戻りたいか』  
周波数が合った。  
老人の言葉が頭にすっと入ってきた。

そんなことが出来るのか。

俺は、反射的に自分の生涯を振り返る。

本当に戻れるのなら、高校時代がいい。

素直になれなかったあの頃。

既に大人社会と繋がりのあった俺は、高校生のすることが子どもに思えてならなかった。

故に十代でしか楽しめない事を何一つしてこなかった。

例えば、同級生との純粋な恋だ。

当時の俺は女の子達からの好意を余計なお世話と突っぱねていた。

子どもだったのはどっちだ。感謝の一つもしてこなかった。

それを今になって後悔していた。

『高校生に戻りたい』

俺は心の中で呟いた。

老人はゆっくりと頷き、俺の頭に手をかざした。

すると、ベッドサイドの光が強く輝き始めた。

光は徐々に大きく、部屋全体に広がっていく。

俺の意識もその中に溶け込んでいく。

瞬間、無になった。

ほんの一瞬、すべてが消えた。

溶け込んだ意識が戻り始める。

光が弱まっていく。

苦しかった呼吸が楽になり、全身に力が漲っている。

先程までとは明らかに違う雑音に導かれ、俺はゆっくり目を開けた。

教室の懐かしい風景。

俺はかつての自分の席にいた。

チャイムが鳴る。

授業が終り、教師が壇上を後にした。

誰かが俺の脇に立つ。

「これ、昨日の授業の分。もう、頭痛治った？ 薬あるよ」

俺は声の主を見上げる。

真奈美だ。

真奈美は、俺が授業を休むと必ずノートを見せてくれた。  
自分では持ち歩かない頭痛薬をくれるのも真奈美だった。  
俺は偏頭痛持ちだった。

「あ、ああ。もう大丈夫だよ」

中身は大人の俺は、真奈美の優しさに心を和ませた。

真奈美は、キョトンとした顔で俺を見る。

「ん？」

俺が不思議そうに尋ねると、

「鮫島君、なんか変」

と、真奈美が言った。

「変って？」

「いつも『大丈夫なわけねーだろ』って言うじゃない。今日はやけに素直だから」

当時の俺は、何を言われても乱暴な口で返答していた。

「たまにはさ、素直になってもいいかなあなんて思うわけよ」

「ふーん」

真奈美は納得のいかない様子だ。そんな真奈美に俺は言った。

「あのさ……いつもノートと薬、ありがとう」

感謝の気持ちを伝えるだけなのに、なぜか緊張する。

初めは戸惑っていた真奈美だったが、すぐに顔をほころばせた。

「鮫島君の役に立ちたかっただけだから」

真奈美は俺の事を嫌ってはいない。

俺はそう確信した。

「放課後、一緒に帰らない？」

真奈美を誘ってみる。

彼女は「うん」と即答した。

二人で校舎を出て、川沿いをゆっくりと歩く。

俺は高校生らしいデートを経験するべく、さりげなく手を繋ぐ。

「今日の鮫島君、優しいね」

真奈美は頬を赤らめる。

もっと真奈美を喜ばせたい。

俺は、照れる彼女を愛しく思った。

雑貨屋に立ち寄り、彼女が「可愛い」と言ったクマのマスコットをプレゼントした。  
真奈美はとても喜んだ。

\*\*\*

次の日、あることに気が付いた。  
俺に好意的な態度を取っていたのは真奈美だけではない。  
隣のクラスにいる恵似子。  
将来のことをいつも悩んでいた。

でも、俺はいつもそっけない態度を取っていた。  
真剣に耳を傾けてやらなかった。  
俺は俺で自分のことで精一杯だった。

夢を持っていた恵以子。  
誰かが背中を押してくれるのを待っていた。

恵似子の気持ちも汲んでやらなければ。  
一度くらい真面目に相談に乗ってやりたい。  
そう思った俺は恵似子を呼び出すことにした。

駅前のファーストフード。高校生の溜まり場だった。  
俺は恵以子の一語一句を漏らさぬように聞き入る。  
親身に接する俺に、恵以子は戸惑いを見せた。  
俺はこれまでの経験を活かし、アドバイスに徹する。

二時間が過ぎた頃。  
「迷いが取れたよ、ありがとう」  
恵以子は晴れ晴れとした表情をした。  
「親が反対してるからなんて、ただの言い訳だね」  
俺が言いたかったことが伝わったようだ。

その後は修学旅行の話で盛り上がった。  
他の客が振り返るほどの笑い声を上げる。  
「鮫島君ってこんなに面白かったっけ？」  
恵以子は終始楽しげだった。



三日目。

とうとう最後の日だ。

俺は素直になることで一種の快感を覚えた。

バイト先にも世話好きな女の子がいたことを思い出す。

京香だ。

俺が賄いをしていた飲食店で、ウエイトレスをしていた。

気の強い女の子だが、何かと俺に構ってきた。

ユニフォームを洗濯してくれたり、遅刻しそうになるとタイムカードを押してくれたり。

助かるとは思っていたが、ありがたいとまでは感じなかった。

頼んだ覚えはない。そのくらい横柄だった。

俺はバイトに出向き、休憩している京香のところに行った。

「ちょっと話があるんだけど」

俺が声を掛けると、京香は「なに？」とつつけんどんに答えた。

「いつも、ありがとな」

俺は純粹にお礼を言った。

これで心置きなく死ぬる。

そう思ったのも束の間、京香は言葉を尖らせた。

「何が？」

「何がって、洗濯とかタイムカードとか。いつもやってくれてるから」

「ふーん」

京香は鼻で返事する。どうも様子がおかしい。

「おまえ、怒ってる？」

恐る恐る聞いてみた。

「怒ってないよ。呆れてんの」

思いもよらない答えが返ってきた。

「え？」

俺は混乱する。

「言われないとわかんないんだ。そういうところがイラつくんだよね」

京香が俺に対し、苛立っていたとは知らなかった。

「鮫島君、他の子にもそうやって声掛けたって聞いたよ？ いつも素っ気ないのに急に親切になったって。いったいどういうつもりよ」

俺は言葉に詰まる。

良かれと思ってしたことが、彼女達に嫌な思いをさせていたのか。

「気まぐれに優しいのって、かえって傷つくんだよ。冷たいなら冷たいで通しなさいよ」

京香は間髪入れずにまくし立てる。

「俺は……」

そう言いかけた俺に、京香は言葉をかぶせる。

「今度は私なの？ いい加減にしてよ」

俺の左頬に衝撃が走った。

「あんたなんて、大っ嫌い」

京香は泣いていた。

彼女の涙を見るのは初めてだった。

どうしてこいつが泣くのかかわからない。

俺は反射的に京香を抱き締めていた。

京香は俺の体を両手で押し返す。

そして、溜めていた物を吐き出すように言った。

「優しくするなって言ってんのよ」

京香はそういうと、腕の力をだらんと抜いた。

俺は静かに告げた。

「ただお礼が言いたかっただけなんだよ。京香はいつも俺の世話してくれるから」

京香は上目遣いで俺を睨む。

「一回お礼言ったくらいじゃチャラになんないよ」

京香はどこまでも気が強い。

少しの沈黙の後。

「もう、死んじゃうみたい」

京香が珍しく心細げに言った。

「ホントだな。俺、死ぬのかも」

言いたい事を言い、胸のつかえが下りた俺にはもう思い残すことはない。

そう思った矢先、京香の顔が突然ぼやけた。

めまいを起こしたように、体がぐらつく。

「鮫島君！ 大丈夫？ 鮫島君……」

驚いている京香の声が徐々に遠くなっていった……。

\* \* \*

意識がぼんやりと戻る。

体の自由が利かない。呼吸は数段苦しくなっている。

『夢を見ていたのか』

俺はそんなことを考えていた。

そこへ老人が現れた。

『三日間、悔いなく過ごしたか』

老人が俺に問い掛ける。

彼女達に会って束の間の青春に浸る。そして感謝を述べる。

悔いなく過去をやり直したはずだが、ここへ戻ってきて新たな心配ができた。

俺のエゴで彼女達を混乱させてはいないだろうか。

硬派に戻った高校生の俺が、彼女達を更に傷つけてはいないだろうか。

そんな俺に老人は言った。

『今のおまえがあるのは過去からの積み重ねだ。おまえはあの頃から、行きつ戻りつしながら過去とは比べようもない慈悲の心を身につけてきた。おまえはこの数十年の間、関わる人々を思い遣る態度を示してきておる。心配無用だ。皆、おまえを慕っておるぞ』

老人はそう言うと、淡い光と共に姿を消した。

直後、人の気配がした。

俺に近寄り、涙声で会話をしている。

「高校生の時、一度だけ鮫島君が優しくしてくれたことがあったよね」

「私達三人だけにね」

「鮫島君のファンはたくさんいたから、優越感に浸っちゃった」

「でも、なぜかあの三日間だけだったよね。すぐ元に戻っちゃって」

真奈美と恵以子と京香だ。

「卒業してからだんだんに、その時みたいな鮫島君になっていったんだよ」

「ツッパってた鮫島君は、いつの間にかいなくなってたね」

「また、話を聞いてもらいたいよね……」

「うん……お喋りしたい」

「だから、元気になってよ……鮫島君！」

彼女達の声聞きながら、俺は気持ちが楽になっていくのがわかった。

いい思い出を作ってくれた彼女達。

俺は間違っていなかったんだ.....。

いい人生だったな.....

\*\*\*

.....知らない女が三人集まって、夫の手を握って泣いている。

高校の同級生？ 優しくしたとかされたとか。

なんかムカつく。

私との時間は何だったの？

お互い忙しくて、あまり一緒にいられなかったけど.....

二人でいる時は、いっぱい笑って、いっぱい泣いて。

長い年月掛けて、二人の絆を深めてきたのに。

.....私はそう思ってたのに。

私にとって宝物だった時間は、過去のほろ苦い思い出に負けちゃうの？

こんなことなら、さっきあなたが朦朧としてた時、目が覚める前に絞め殺してやれば良かった

。

そうすれば、感動の再会なんてなかったのに。

最期まで、二人の幸せに浸っていられたのに。

最後の最後で憎まなくちゃならない。

そんなの嫌だ.....

酷だよ.....

大好きなまま、お別れがしたいよ.....。

私は居たたまれなくなってきた。

もう、帰って！

怒号しそうになったその時。

「妻と.....二人にしてもらえるかな.....」

出せないはずの声を振り絞り、夫が言った。

夫は、彼女達の間隙から私に手を差し出す。

私は夫の手を握り締めた。

痩せちゃったけど、私の大好きな大きな手。

私の指の関節一つ分、大きな手。

ずっとこの手に支えられてきた。

その手から、夫は私にメッセージを伝える。

.....ありがとう、俺のすべてを受け止めてくれて。

そして、夫は息絶えた。

ずるいよ.....

物わかりのいい女にしないでよ.....。

私は泣き崩れる。

やっぱり、愛していることに変わらない。

完



鮫島、三人の元カノに会いに行く

<http://p.booklog.jp/book/91158>

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91158>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91158>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ